

「全学共通教育」のひろば

No.13 特集号

# Un roseau アンロゾ

総合教育科目ガイドブック



大阪市立大学基礎教育実験棟

## 大学で学ぶということ

経済学部・経済研究科 長 沼 進 一

## 「逆T字型」学習、「文理両道」学習のすすめ

工学研究科 土 井 幸 平

## 外国語学習のすすめ — 英語教師の回想 —

文学研究科 横 山 徳 爾

2002年3月

編集・発行 大阪市立大学教務委員会

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2935

タイトル “Un roseau (アン ロソ)”

— 一本の葦 — について

.....  
B. Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme est un roseau pensant.

(ロム エタン ロゾーパンサン)

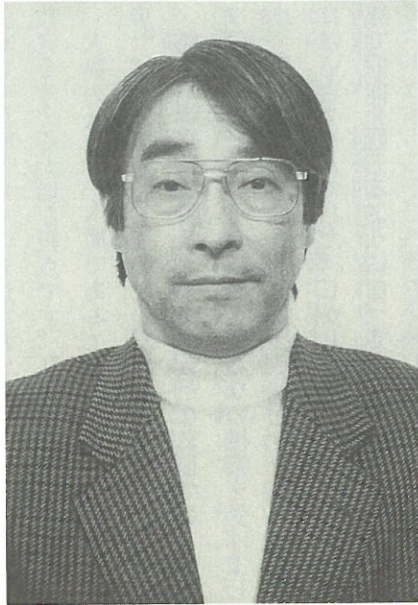
— 人間は考える一本の葦である —

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える（思考する、思想する）という行為によって、有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

## 大学で学ぶということ

経済学部・経済学研究科 長 沼 進



### 一 水戸で学んだ外国語

これからお話しすることは大学紛争の真っ只中で学んできた私の体験です。

わたしの出身大学は旧制の水戸高等学校が新制の大学になった茨城大学です。わたしが入学して二年目に

教養部ができ、現在とはまったく異なる方向での改革がなされた時代に大学で学びました。旧制の名残りなのか、その大学の個性なのか、わたしはおもしろい体験をしたと考えています。

現在でも語学についての不満を耳にしますが、わたしの履修した英語の授業ではシネマ英語を教材にした授業あり、アメリカ合衆国憲法を教材にした授業あり、言語学の入門書を教材にした授業ありで、高校では学べないイギリス文化論やアメリカ文化論を英語をつうじて勉強できたという満足感がありました。ある先生はパール・バックの『大地』を教材に選ぶと、他の先生はローデシアにおける女性解放に関するエッセイを教材に選んでくれました。知らず知らずのうちに私たちは女性解放論を勉強していました。語学力が高まった以上に、私たちは人間の権利について思索していたのです。また、ある先生はソローの『市民の反抗』を取り上げ、別の先生はアンブローズ・ピアス短編集を取り上げましたが、これらも個人の権利と政府や権力の対立について説いたものです。みなさんは不

思議に思うかもしれませんが、当時は全世界の学生がベトナム戦争に反対し、世界の平和を希求して大学改革に立ち上がりました。学生と教員の距離は否応なく縮まらざるをえなかったわけです。教えるのではなく、一緒に学ぼうとする姿勢がみられました。それが教材にも反映したものと思われれます。このことは大学教育を考える大切な視点です。私たちは語学を通じて「人間の本质」「人間であることの意味」「人間の進歩」について勉強していたのだと思います。

他方、新修外国語はドイツ語をとりましたが、ドイツ語会話で一年間、日本語を使わない授業を受けました。その授業は緊張の連続でとても授業を楽しみませんでした。はいきませんでした。しかし、いつの間にかドイツ語で歌曲を歌えるようになっていました。原語でリルケの詩を読もう、ゲーテの『ファウスト』を読みたいという思いがドイツ語の修得に駆られたきっかけだったようです。入学すると同時に、文芸部の主催する二つの研究会に参加していました。どちらも助手、講師など若手教員が指導していました。ひとつはT・S・

エリオットの『荒地』を読む会、もうひとつは不条理の文学を読む会でした。英詩を読む基本作法を教えてくださいらうと同時に、言葉（原語）のもつ息づかいを感性で読み取る訓練をしていたようです。もうひとつの研究会ではカフカ、サルトル、カミュを読んでいたことが、参加者の誰もがよく理解できていませんでした。よい指導者がいなかったのです。カフカはドイツ語で読めましたが、フランス文学は英語でしか読めませんでした。ペンギンのペーパーバック版で読もうとしましたが、微妙な心理描写を表す言葉が英語には欠けているようで、辞書の奥の奥を探さないと見つからない言葉で翻訳されているものが多く、楽しめるようなものではなかったようです。その思いが数年後には私をしてNHKのフランス語入門でフランス語を独学させることになったのです。

みなさん、もうお気づきでしょうが、当時の外国語学習は実用語学ではなかったのです。トランスナショナル化が進み、人と人の交流が活発になり、情報通信技術の発達により文化交流が活発になっている現在、

外国語は身近な日常的言語になっています。流麗で洗練され、淘汰された文学としての言語の価値よりも、民族を異にした人々の意思疎通のために、お互いに分かり合えるための手段としての言語の価値が高まってきています。こうした需要を満たすために授業構成が再編され、授業内容も変わりつつあります。しかしながら、数千年にわたり育てられてきた言語文化は人類の大切な遺産です。教育の役割はそれらのいずれの需要をも満たすものであると考えられます。学ぶことの難しさ、教えることの難しさもそこにあるようです。

## 二 専門研究のベースとしての教養学科

一般教育科目でも授業内容は特徴がありました。生物学では一年間、アユの話を書きました。くる日もくる日も、アユを題材にした話ばかりが並びます。食べる分にも、いくらおいしくてもアユを食い続けると食傷気味になるのに、授業のたびにアユの話を書く

です。飽きさせないためには、おそらく何か工夫があったのでしょう。サケとアユの違い、岩魚や山女とアユの違い、なわばりと友釣りの関係、アユの香りと食性の関係、いま思い出すだけでも興味津々です。いま考えると、それは生態学をまじえた内容だったように思えます。それは社会学において組織論を勉強する際にも役立ちましたし、東京都公害研究所の非常勤研究員の仕事でも水質汚濁研究ということで勉強が無駄にはなりませんでした。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を読んだのをきっかけに東京湾をきれいにし、干潟を残し、多摩川を化学洗剤汚染から救う動機づけにもなりました。

化学の出身は量子化学でしたが、専門書を図書館で借り出して復習しないとついていけない授業でした。化学専攻の先輩をつかまえては教えてもらいました。エントロピーという言葉が頭から離れなくなったのはその時からです。情報論を勉強し、エントロピーが情報量をあらわす単位として用いられることを知って、私の頭の中はますますこんがらがっています。「伸ば

したゴムひもは縮む」「冷蔵庫は熱を出すから冷える」といったことが乱雑に頭の中に入っているからです。ですから、いまでも教科書だったガモフ全集の第一巻『不思議の国のトムキンス』が処分もできずに本棚に納まっています。

西洋史も変わっていました。一年間ギリシャ文化史を勉強することになったのです。先生がなんどもギリシャを訪れ作成したスライドを観ながらの授業でしたが、ギリシャの古代都市を埃まみれになりながら、旅している思いの授業でした。試験休みや夏休みのあとの授業はとてものしみでした。ギリシャ・ローマを中心に調査旅行してきた土産話が聞けるからです。いまま思いに、地中海文化論は当時の歴史学におけるフロンティアの研究領域だったようです。ブローデルの研究成果もそのような中から出てきたのではないでしょう。三浦一郎先生の博識はその後『世界史こぼれ話』（角川文庫）として十数巻にまとめられています。先生から教わった歴史観はアーノルド・トゥインビーの文明史観とは違う歴史観だったようにおもわれます。

ます。

哲学ではヤスパースの哲学入門で神の存在と人間の実存について勉強しましたが、当時、朝日新聞に連載されていた三浦綾子の『氷点』を題材に人間の原罪について問答がありました。先生は敬虔なクリスチャンでした。わたしの哲学的思索の原点はこの時創られたようです。包括者としての神の存在を熱心に説いておられましたが、神の存在を否定したサルトルとの違いがどうしてもわかりませんでした。このことが聖書を読むきっかけになりましたし、パスカルを読む誘因にもなりました。専門課程でマックス・ウエーバーを勉強し、西洋経済史の大塚史学を学ぶ際にもこうした聖書を読んだ経験が役に立っていました。意図的でないものが結果として役に立つ。神と人間の関係をあらわしている聖書、人間の行動原理をあらわしている仏典、これらに一度は触れてみることに、それは「人間であること」を考えるには必要なことのようにおもわれます。

また、政治学ではアリストテレスの政治学を一年間

聴くことになりましたが、これがプラトンを読むきっかけになったことは驚きです。なぜ概論や通史ではなく、特定の個人の哲学や個別の研究領域のテーマが取り上げられたのか、訊く術はありません。知識を得るのではなく、考え方を学ぶのであれば何ら都合はないわけです。民主政治の本質を学ぶことは民主政治の実態を勉強することに通じるわけで、現代政治を学ぶのにアリストテレスを読むことはさほど奇異なことではないのです。

### 三 魅力のない学科

経済学専攻の私にとって最悪だったのは一般教育科目の経済学が刺激のない、退屈な科目だったことです。テキストにも問題がありませんし、教え方にも問題がありました。要するに、経済哲学がそこには無かったのです。テキストには制度と仕組みが書かれているだけでした。先に述べた科目には先生がこのことだ

けは教えたいという信念と情熱が込められていました。あえて概論を教えないことには意味が無ければなりません。もの見方と考え方を教えるのに概論が必ずしも必要というわけではありません。他の科目でも学べたことは経済学を学ぶにも役立つはずである。私の自学自習の奮闘が始まりました。アリストテレスとヤスパースを読むかわら、古典派経済学の二人の巨匠、アダム・スミスとカール・マルクスの原典を読むことを始めました。こうした取り組みを始めてまもなく、これらの経済学者の研究者であるすばらしい先生にも出会うことができました。授業以外に経済学を教えてくれる人が現れ、経済学に興味を持たせてくれました。その先生は経済学説史を通じて『厳密な科学としての経済学』を志向している私に『思想としての経済学』の眼を開かせてくれました。このような私の経験から、全学共通のリベラル・アーツ（教養学科）は必要だと考えています。啓発的な思想との出会い、聡明な人との出会いは人生をとてても豊かなものにしてくれるはずで

#### 四 学ぶスタンスを決める

以上お話ししたことは私の経験にもとづく大学での学び方の基本姿勢についてです。みなさんにとつて興味があるのは「バンキョウ」と蔑みの言い方で呼ばれる全学共通教育科目についてであろうと思われれます。その言葉が一般教育科目の略語だとは知らない学生も多いのではないのでしょうか。これはかつての教養部が提供していた科目です。教養部がなくなり、教育科目の体系が大幅に改革された今日においても、それらの言葉がこのまま残っていることはとても残念でなりません。なぜなら、そうした言葉が残っている限り、新たな教育体系を創設した意味が薄れてしまうからです。教育内容は改革以前と少しも変わっていないということがその言葉に表現されているようで、教える身としては反省を強いられているようです。

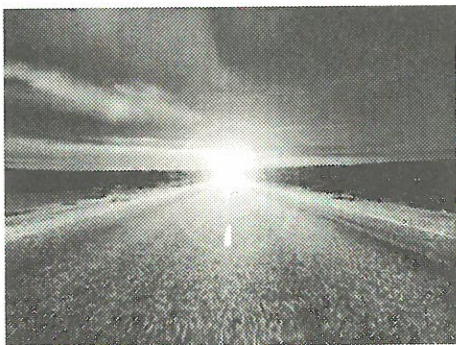
卒業単位を取るために必要な科目としてしか全学共通教育科目を見ないことは不幸なことです。単位の取り易い科目を履修するという選択にはならぬ計画性があります。なんでも勉強できる自由が大学にはあ

る。それを利用しないことには宝の持ち腐れになってしまう。大学にはもの（施設）があり、人（研究者や学生）がいる。無いのは金だけである。人、金、ものがあつて、衰退した経済社会が活性化するといわれています。三つのうち二つが大学にあるのです。大学というのは市民にとつてたいせつな財産です。ものが生まれる創造の源泉が大学です。ありとあらゆるものが生み出されるという意味で総合性をもっています。しかし、そのことには気づかず学ぼうとしているようです。主体的な取り組みが無く、教えてもらおうと受身で待っているようにも思われます。どうしてこのようになつたのでしょうか。本来なら、そのこと自体知りたいと思うはずです。

漠然と学ぼうとするのではなく、目的をもつことが大切ではないでしょうか。目的はいつかでてくるものではなく、求めるものだと思います。目的を就職に結びつけることは無いのです。むしろ、生涯の自分の生き方に結びつけて目的を決めるべきです。いまをどのように生きるべきか、いま何を学ぶべきか、

避けては通れない岐路に直面しながら、ゆらぎながら考え日々、行動しているというのが実情ではないでしょうか。わたしたちは迷っています。苦悩しています。しかし、喜びを求めています。大学で学べるということは大変恵まれたことです。それをどのように活かすか考えてみたいものです。

みなさんにも大学でのすばらしい出会いが訪れることを期待してやみません。



## 「逆T字型」学習、 「文理両道」学習のすすめ

工学研究科 土井幸平



### 大学の学問力

60歳を越えた私が、20歳前後の皆さんにメッセージを送る。はたしてうまく伝わるかどうかと思いつながら私の経験を記してみます。

人生の時々ことはよく憶えていること、忘れ去っていることが混じり合っていますが、40年前大学に入った頃の澄み切った青空を見上げるような気分は今もよく思い出せます。とにかく窮屈な受験勉強からの解放感もあったと思いますし、大学に入ったらやりたいことが沢山できるような気分がしていました。しかし、高校を卒業した時の恩師の言葉が今も強く耳に残っています。「君達の学力は今がピークだよ、後は下り坂だと思え。」という意味のことを言われたのです。そんなバカな、とその時強烈に思いました。大学に入ったから自由に伸び伸びと自分の思いどおりの勉強をして学力を上げていこう、そして社会に出たらさらに深く学ぶことができるのだという思いが強くなったからです。しかし今振り返ると恩師の言葉はいろいろな意味であたっていたなという実感がありません。

それは、どうしてでしょうか？

大学は学問をする場です。学問とは、学び問いかけるという意味でしょう。学び問いかける力は必ずしも知識量によるものではありません。これは先生も学生

も同じです。問題はストック（積分量）ではなく、フロー（微分量）としての学問力です。皆さんが大学に入学したということは一人前の学問力が認められたということなのです。人間の3歳児は、言葉、算数、音感などに染み込むような驚くべき学習力を発揮します。この学び習う力のピークは15歳あたり迄で後は下り坂です。同じ意味で、学問力のピークはいつでしょうか。それは20歳台ではないかと私は思います。いつの時代も社会に対する最も鋭敏な問いかけを発揮してきた存在です。その意味では、大学の実力・活力とは、教員—研究者の学問力の総和だけではありません。皆さん方学生、大学院生の学問力の総和でもあるのです。

### 学問力を養う総合教育科目

学問力を養うにはどうするか。学び問いかけるわけですから、疑問を持ち質問をする訓練が基本です。講義に出たらできるだけ質問をする。先生でなくても隣

の学生や友人に質問するようにして下さい。自分で自分に質問する、自問自答も大事です。良い質問か、よくない質問かは問いません。とにかく沢山の質問をすることを心がけてください。では、沢山の質問をするにはどうすればよいか。視野を広げる、違った視点を手に入れるということが重要になります。総合教育科目を受講して役立てて下さいということなのです。

総合教育科目は、学問力の基礎を養う場として用意している科目です。シラバスをよく読み研究して下さい。皆さんの前には、多彩な科目、広いフィールドが用意されています。大阪市立大学の総合力を生かした自信のキャリアラムです。では、その中からどんな科目を選ぶべきか。面白そう、高校時代から興味があった、自分の目指す専門から最も遠い、先輩の口コミ、楽勝そう、などいろいろな動機でかまいません。できるだけ視野を広げ、自分の目指す専門を外から見ると点をつくる。ことが、専門をより高く立ち上げる上で栄養を与えてくれるでしょう。「逆T字型」学習、つまり広い基盤の上に専門を立ち上げようという戦略で

す。私のコメントは、科目の選択を頭の中をフィールドとしたサッカーゲームに例えた場合、イタリアの中田選手、オランダの小野選手のように、「広く展開して、鋭くパスを出せ」、ラグビーゲームに例えれば、「広く展開せよ、そして中央を突進せよ」です。

### デカルトの『方法序説』

高校までに培った学習力は人生の貴重な財産です。これはいつも痛感します。私は大学に入った当時、高校で習わなかった哲学の講義をとってみようと考えました。その内容はすっかり忘却の彼方ですが、一冊の文庫本が手元に残りました。岩波文庫の『方法序説』です。25ページに鉛筆のアンダーラインがあります。学問の方法は次の4つで十分であると書いてあるのです。そのまま引用してみましよう。

① 明証的に真であると認めることなしには、いかなることをも真であるとして受けとらぬこと。それを

疑ういかなる隙もないほど明晰、判明に私の心に現れるもののほかは、何ものをも私の判断に取り入れぬということ。(明証性、一部略)

② 私の研究しようとする問題のおののを、できる限り多くの、そうして、それらのものをより良く解決するために求められる限り細かな、小部分に分割すること。(分割性)

③ 私の思索を順序に従ってみちびくこと、知るにもつとも単純でもつとも容易であるものから始めて、もつとも複雑なものの認識へまで少しずつ登り、(論理性、一部略)

④ 何一つ私はとり落とさなかつたと保証されるほど、どの部分についても完全な枚挙を、全般にわたって余すことのなき再検査を、あらゆる場合に行うこと。(検証性)

17世紀にデカルトが示した4項目の学問創造法が、近代科学の発展に強い影響を与えました。複雑な現象をできるだけ細かく分割し、その内部で合理的であるように学問を構成するという考え方です。専門化によ

た。

◎第一卷「マンモスハンター、シベリヤからの旅立ち」―日本人の北ルート説

日本人の祖先、1万年前頃の早期縄文人の骨DNA配列とアジア人のDNA配列データを比較分析した結果、現在シベリヤに住むブリヤート人もつとも近いことが分かったのです。2万年前の氷河期最後の最寒期、マンモスの草原が南下し主食マンモスを追って陸続きの日本列島に祖先は南下したらしい。最新のDNA分析を導入したDNA人類学がルーツを検証したのです。

◎第二卷「巨大噴火に消えた黒潮の民」―日本人の南ルート説

海面の下降した氷河期、インドネシアからフィリピンにかけて温暖な豊かな環境のスンダランド大陸に住み着いていた人類のうち、氷河期後の地球温暖化で大陸が水没し黒潮伝いに北上した人たちが縄文人のルーツとする説です。一九九七年工業団地造成中に見つかった鹿児島県の「上野原遺跡」には三つの地層があ

り科学が生まれ、科学はますます領域を細分化して発展してきました。学問は、専門化・細分化によってそれぞれの到達点を高めました。その結果、私達は膨大な学問の恩恵を享受していると同時に、学び切れない沢山の勉強量を抱えてもいるのです。

### 『日本人はるかな旅』

少し話題を変えましょう。私は昨年の秋、NHKスペシャル『日本人はるかな旅』をたまたま見てすっかり感動しました。実に興味深い番組でした。20代の頃から学び、問いかけ続けてきた問題とそれへの解答を、明快に表現してくれていたのです。

5週5回分の番組で、テーマは、「日本人のルーツ探し」です。私たち日本人はどこから、いつやって来たかを先史時代、それも人類の起源にまでさかのぼって探そうというものです。私が高校時代に学んだ石器時代、縄文時代、弥生時代の知識を一新するものでし

り、九五〇〇年前の日本最古の大規模な定住集落の上に、七五〇〇年前、六三〇〇年前の定住集落が重なり、いずれも南方系の石器類が見つかっています。六三〇〇年前の海底火山「鬼界カルデラ」の巨大噴火に埋もれてしまったのが4年前に発掘されたのです。火山考古学の成果でもあります。

◎第三卷「海が育てた森の王国」―「木」が縄文のキーワード

一九九二年発掘の青森県「三内丸山遺跡」は四五〇〇年前頃が全盛期で、竪穴住居一〇〇棟、人口五〇〇人の大集落、一九九四年直径一メートルの巨大木柱が発見され、木組み工法による巨大建造物が想定されました。推定45メートル高さの出雲大社の巨柱遺構、法隆寺などの精妙な木組み日本建築の伝統につながる高度な技術文化「木の文化」の原形が見出されたのです。この時代は丸木舟による広域交流が盛んで、黒曜石石材やヒスイ装飾品が流通し、海の幸、山の幸の市場交換も行われていました。今より気温が2度ほど高い六〇〇〇年前、黒潮暖流の生む湿潤気候が降らせる

雨が列島に築いた森の王国の多彩な縄文文化です。

◎第四卷「イネ、知られざる1万年の旅」―縄文のイネ、弥生のイネ

一九九九年、岡山県の「朝寝鼻貝塚遺跡」から六〇〇〇年前の稲作の痕跡が発見されました。プリントオパール分析法による古代植生学の成果です。二三〇〇年前頃、水田稲作をもって弥生人が朝鮮半島や中国大陸からやってきた。という教科書の常識が覆されたのです。縄文人の焼畑農業にあった陸稲栽培のイネは五〇〇〇年前のラオス・雲南起源、揚子江下流から伝来した弥生人による水田栽培のイネは一二〇〇〇年前の揚子江中流起源、この二つの系統が交じり合って、日本のイネは沖縄から北海道までに定着したというのです。

◎第五卷「そして日本人が生まれた」―縄文人と渡来人の融合

秦の始皇帝による統一前の春秋戦国時代、戦乱から逃れ中国から大量に渡来した人たちは列島に初めて現れた農耕民族です。この渡来人と狩猟採集民の縄文人

の遭遇、対立と融合の中から弥生人が誕生した。北ルート、南ルートから広域に展開した縄文人と多彩な縄文文化、中国からの渡来人と生産力の高い農耕文化が、弥生時代の六〇〇年間、外からの影響を受けつつ日本各地でさまざまに融合した人たちの集合が日本人。

私が高校で習った歴史年表には、先史時代、有史以前あるいは原始時代などの記述はごく僅かでした。書かれた資料、文献のない時代はいわば沈黙の時代で、考古学や人類学がこの課題に取り組んできました。それが日本経済の高度成長後の30年余りで急速に研究が進んだのです。高度成長期には全国的に住宅団地、工業団地の開発、道路建設などの都市開発が行われ、その過程で吉野ヶ里、三内丸山、上野原など多くの遺跡が発掘されたのです。これらの発掘調査から格段に研究が進みました。

### 「文理両道」のすすめ

私の大学生時代、人気の学問の一つに人類学、文化人類学がありました。考古学は比較的地味な人気だったと思います。『日本人はるかな旅』の番組は、人類学と考古学の二つの学問分野の発展がベースになっています。少し長い紹介になりましたが、現代の学問に共通する次のような到達点を示していると思ったからです。

① 学問の専門細分化による研究の広がりと高さ

人類学は、文化人類学、形態人類学、民族学、民俗学、DNA人類学など、考古学は、環境考古学、火山考古学、古生態学、古海洋学、植物遺伝学などに示される、専門細分化により高度な研究が進められていること。

② 文系学問と理系学問の融合

DNA分析やプリントオパール法など理系学問方法が文系学問に適用され、研究の飛躍的な進展をもたらしたこと。

③ 学際研究の成果

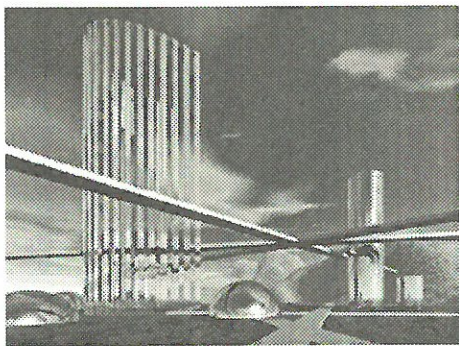


共有テーマの下に、人類学、考古学及び関連分野の諸学問が連携協力し、単独ではなし得ない総合的な大きな研究成果をあげたこと。

#### ④ 映像表現の効果

テレビの番組では、コンピューター・グラフィックス(CG)が先史時代の景観を再現して効果を挙げていました。映像は一目で全体像を把握させる力を持つものです。映像化は今後IT技術の進展により、文系・理系諸学問の表現と総合にますます大きな力を発揮するでしょう。

今、学問の世界は、細分化から連携と総合へ構造改革されつつあります。この番組から見取れた4つの傾向は、どの学問分野にも共通して起きていることです。それを考えると、皆さんの進むべき道は、「文理両道」学習でしょう。文系の学生は理系科目を、理系の学生は文系科目を選択するようにならなくてはしょうか。私のサゼッションです。



## 外国語学習のすすめ

——一英語教師の回想——

文学研究科 横山徳爾



私は一九七三年四月以来大阪市立大学において全学共通教育の英語を担当してきましたので、二〇〇二年三月末で二九年間英語を教えてきたことになりました。それ以前に私立大学で三年間やはり英語を教えています。

したので、大学における英語教師歴は三三年になります。すでに中学・高校時代に英語はもともと好きな科目であり、同時に得意な科目でもありましたから、英語教師の道を歩むことができたのは、私にとっては幸せなことであり、いわば天職であったといえるかもしれません。今ふりかえってみても英語教師としては全力を尽くしてきたと自負しています。

しかし私は、自分が身につけてきた教養の体系というものが、現在の大学生のみなさんのすべてに参考になるとはけっして考えておりません。したがって大学生のみなさんに少しでも参考になるかもしれないのは、やはり一英語教師としての私の外国語学習の体験ではないかと考え、個人的な回想を通して外国語、特に英語の学習について書いてみることにしました。

中学・高校時代(一九五一一五七)の私にとって は、英語の勉強は外国映画と結びついていたように思われます。私は小学校高学年のころから少女世界文学全集の類を耽読し、アメリカやヨーロッパという

異文化の世界におおきな好奇心と憧れを抱いていました。中学生のころから洋画の大ファンとなりました。洋画がおもしろかったのは、世界名作によって喚起された外国にたいする好奇心をある程度満足させてくれたからにはかなりません。当時、私が住んでいた町には映画館がふたつあり、中学への通学路の途中に上映中の映画の広告が掲示されている場所がありました。いつもいっしょに通学する友達としばらくその広告をながめていたものです。映画を見に行ける日は楽しくて学校の勉強にも身が入らなかったことを憶えています。当時、夜の映画館はかなり冷え込みました。たいてい満員になっていました。そのころ上映されるのは西部劇がおおく、ヨーロッパ映画はごくまれであったようですが、ほとんどが歴史に残る名作ぞろいであつたといえます。

高校生になると、大スペクタクル映画と銘打った、古代ローマ史や聖書世界に材を取ったハリウッド映画がつぎつぎに現われ、わざわざ難波あたりまで見に行つたこともよくありました。こういうときには、飽き

もせずおなじ映画を三回くらい見たものですが、ときどき頭に残つた英語の短い表現でいまでも憶えているものもかなりあります。いずれにせよ、テレビもビデオもない時代ですから、映画というものが、英語にふれ、異文化を体験するほとんど唯一の機会であつた事情は、格安航空券で簡単に外国へ行ける現在の大学生のみなさんにはとても理解できないでしょう。

高校時代の英語の勉強について忘れてはならないのは、当時旺文社から出ていた『ユース・コンパニオン』という英語雑誌です。注釈つきの時事英語や英文学の名作の解説、話題の映画のシナリオの抜粋や歴史上の著名人の伝記的な紹介など、英語についての興味深い話題が満載されてきました。内容はかなりむずかしく、高校一、二年生のときは歯が立たなかつたのですが、三年生のころにはかなり熱心に読んだのを憶えています。表紙の絵も美しく、外国の写真も多数掲載されていまして、まさに英語世界への窓として、毎月楽しみにしていたものです。この雑誌の何冊かはいまでも私の書庫のどこかに残っているはずです。

こうして私は高校時代にはかなり余裕をもって英語を勉強していたように思います。しかし高校時代には、理由ははっきりしませんが、英語のつぎに学ぶのはドイツ語であると思ひ込んでいましたので、大学では躊躇なくドイツ語を専攻しました。私にはいまでもドイツという国とその文化にたいする強い親近感ないし親愛感がありますので、ドイツ語を選んだ背後には、当時もそのような気持があつたのかもしれませんが。大学を卒業したのは一九六二年でしたので、卒業論文では、オットー大帝の皇帝即位一千年記念と称して、オットーにはじまる神聖ローマ皇帝のイタリア政策（皇帝政策）の功罪を論じました。ドイツ人教師にヘルマン・ボーンネルという有名な先生がおられ、先生は私の卒論について、これは「特異なテーマに独自の興味」を示した卒論であるという意味の批評をされたと聞きました。たしかにそうだと思つたものです。

ところが大学卒業後、英語を読む機会がきわめておおくなり、やがて英語の小説を耽読するようになりました。きっかけは、サマセット・モームの作品を読む

ようになったことです。いま梅田のヒルトン・ホテルになつてゐるあたりに旭屋書店があり、その裏手に洋書のコーナーがありました。梅田に行く機会があるといつもここに立ち寄つて、一、二冊買つていたのですが、あるときペンギン・ブックスで出たモームの『人間の絆』が並んでいました。そのころよく買ったイギリスのペーパーバックの値段は、三シリング六ペンス（二百四十円）というのがおおく、当時は岩波新書が百円でしたから、その二冊分と少し程度の値段でした。ところが『人間の絆』はかなり分厚く六百七ページもあり、値段も六シリングでしたので、読み終わるにはかなり時間がかかるだろうなと思ひながら読みはじめると、ひじょうにおもしろく、残りのページが少なくなるのが惜しいほどの気持で一気に読み終えたのを憶えています。大学卒業の翌年の一九六三年のことです。

私たちの時代の大学入試の英語の問題には、バートランド・ラッセルとともに、モームのエッセイがよく出題され、また高校の教科書にも使われていましたの

で、モームの文章にはしばしばふれていたのですが、小説作品を一冊読むことによって、モームとはこんなにおもしろい小説を書く作家であったのか、とはじめて知ったわけです。じつは大学時代のテキストでモームの短編「淵」を読んでいたのですが、あまり印象に残っていなかったことになりました。そういうわけではなくモームを読みつづけました。ペンギン・ブックスではまだモームの作品は他に三点しか出ていなかったで、心斎橋の丸善などでアメリカ版のペーパーバックを探し、バンナム・ブックスで『劇場』『丘の上の別荘(女ごころ)』『クリスマスの休暇』などを、エイヴォン・ブックスで『アシエンデン』を、ポケット・ブックスで『三つの喜劇』を読みました。そのころアメリカのペーパーバックの値段はほぼ五十セント程度でした。モームの作品でどうしてもペーパーバックで入手できないものは、ハインマンの選集本を一冊づつ買いました。そのころ新聞などで晩年のモームの消息が日本でもときどき伝えられていましたが、絶版のためどうしても入手できない作品があり、モーム

が死ぬと再版されるのではないかと思っていると、はたして一九六五年に訃報が伝えられ、予想どおり、ハインマン版やペンギン版ではほすすべての作品が揃うことになりました。モームの英語は平易ながら格調正しく、ストーリーは抜群におもしろいので、いまでも商社員などにもモームの愛読者がかなりいるのは当然のことといえるでしょう。私も一時はモームのような英語を書きたいところざし、努力したことがありました。また一時は教室でモームの小説を読んでみるようにクラスに学生たちに熱心にすすめたものです。

こういうわけで私は英語の小説を、そして少しのちには歴史の本をつぎつぎに読むようになりましたが、イギリス文学を学ぶようになってからも、文学史上の重要な作品、特に専攻したイギリス小説にかんしてコラッドやハーデーらの作品を精読して勉強するほかにも、一時は四つのブッククラブに入り、イギリスとアメリカの三つの書評紙を購読していましたので、話題になっていてもおもしろそうな本はかなりたくさん読みました。たとえば、現在ではベストセラー作家とし

て有名なケン・フォレットの処女作がアメリカで話題になったときには、私は別のタイトルのイギリス版でとくに読んでいたものです。また私はシドニー・シエルドンのもつとも初期の読者のひとりであろうと思っています。他方、『タイムズ文芸付録』などの書評によって買って読んでみた作品の作者がその後消えてしまった例も少なくありません。さらに、英語、ドイツ語、フランス語のひとつでも読めるようになると、それによってたとえばギリシア・ローマの古典の現代語訳を読むことができるわけです。岩波文庫などに古典の古代の作品の日本語訳がいかにおいといても、それは現代ヨーロッパ語への翻訳の比ではありません。このような読書から自然に身についた英語にたいする感覚は、私の英語の基盤を形づくっていると信じています。

さて、私が英語とドイツ語のつぎに接した外国語はフランス語とイタリア語でした。私の場合、フランス語とイタリア語は大学の教室で学んだのではなく、ラジオ講座によるものでした。私が大学生のころ、フラ

ンス語は前田陽一氏がラジオ講座を担当しており、またイタリア語は一九六〇年のローマ・オリンピックの機会に下位英一氏が担当するラジオ講座がありました。後者は早朝の番組であったので、途中で寝入ってしまい、ふと気づくと別の番組になっていることがよくありましたから、このときのイタリア語はまったく身につかなかったといえるでしょう。後年、英語の教師になってからですが、事情があつて、一九七〇年代にはスペイン語をかなり勉強しました。このときはもっぱら参考書を読んで勉強しました。大阪外大のスペイン文化史の教授であつた故M君は、昔大阪市大へもスペイン語を教えにきていましたが、私の大学時代の同級生であり、私のスペイン語の勉強ではいろいろ助言してくれました。いずれいつしよにスペイン旅行をする機会があればと願っていたのですが、残念なことに数年前に他界してしまいました。それぞれの言語の専門家が近くにいと、おおきな刺激になることはたしかです。スペイン語の本は私の場合ニューヨークのラルースから取り寄せることができました。ちなみ

## ●●●●● 筆者略歴 ●●●●●

### 長 沼 進 一 (ながぬま しんいち)

1948年生まれ  
1977年 東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得退学  
現在、経済学部・経済学研究科教授  
専攻分野／財政学、証券経済論、都市問題論  
担当講義／現代経済学入門、地方財政論、マクロ経済学

### 土 井 幸 平 (どい こうへい)

1939年生まれ  
1967年 東京大学大学院数物系研究科博士課程単位取得退学  
現在、工学研究科教授  
専攻分野／都市計画・都市デザイン  
担当講義／大阪の都市づくり、環境都市工学総論

### 横 山 徳 爾 (よこやま とくじ)

1938年生まれ  
1970年 大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了  
現在、文学研究科教授  
専攻分野／英語、イギリス文化  
担当講義／英語、英米文化概論、英米文化演習

## 編集後記

『アン ロソ』第3号をお届けします。  
昨年ノーベル化学賞を受賞した野依良治教授が「人間力」ということを言っておられます。「研究者といっても、結局「人間力」が物を言う。コミュニケーション能力を培う必要があります。日本人は言葉のハンディがありますが、それはある程度言い訳にすぎなくて、本質は教養の問題だろうと思いますね」  
「人間力」つまり「教養」とは、相手の文化や立場を理解する知性ととらわれない柔らかい心です。この「人間力」を育てるのが、大学ではまず総合教育科目や外国語科目です。本号でも三人の先生方が、それぞれの立場から「人間力」の育て方を話してくださいました。学生諸君にとって、この冊子が豊かな大学生活への道しるべとなることを願ってやみません。  
読後の意見・感想があれば下記にご一報ください。なお、その際、氏名公表の可否も明記してください。

大阪市立大学公式ホームページ 大学教育検討委員会ホームページ  
kentoi@mae.osaka-cu.ac.jp

に、ドイツ語の本は、大学生のころからミュンヘンのメール・オーダー・カイザーという通信販売の本屋から毎月カタログを送ってきましたので、いまもときどきヨーロッパの都市、宮殿、城などの写真集などが割合安く買えるため、その種の図版のおおい本を買って楽しんでいきます。(最近は経営者が変わったのか、またクレジット・カードが使えなくなりました。)結局、私の経験からいえることは、外国語はやはり大学時代に教室でしっかり基礎を身につけておくにかぎります。たとえその後その外国語とはあまり縁がなくなり、ほとんど忘れてしまったとしても、教室でしっかり学んだことのある外国語は、必要となったとき、はじめての外国語を学ぶよりもはるかに容易であるといえるでしょう。

ところで私は全学共通教育の英語の授業を担当してきたわけですが、英語ということばはイギリス、アメリカその他の英語使用圏の文化そのものであるというのが私の基本的な考えですので、私の場合は特にイギリス文化の研究に努力してきました。イギリス文化を

研究する者にとってイギリス留学やイギリス旅行が何よりも貴重な研究と勉強の機会であることはいうまでもありません。しかし私の場合、イギリスだけでなく英語圏以外のヨーロッパ各地での体験も、語学教師としての私にとってひじょうに価値のあるものであったことを特につけ加えておきたいと思います。

またたしかに英語を学ぶには英語圏での勉強は貴重です。すでに数年前から大学生のみなさんがイギリスへ語学留学をすることなどは、ごくのたりまえのことになってしまい、英語学校への一か月くらいの短期留学なら気楽に出かけているようです。これほどヨーロッパが近くなり、「外遊」などという言葉はほとんど死語になったいま、外国語を学ぶ環境が私たちの学生時代とはめざましく変わってしまい、これはたいへん喜ぶべきことです。しかしそれとともに広範な読書によって得られる語学力というものをけっして軽視してはなりません。私たちの外国語学習の目的は、ただ外国語でホテルのチェックインをしたり、買物をするなどにとどまってはならないと考えるからです。